

陳舜臣さんを語る会通信

NO.39 Jun. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

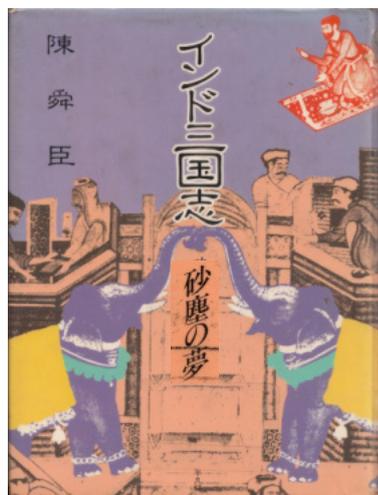
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年6月1日

陳舜臣さんにとって「インドは我が青春の一部」 『インド三国志』

前号で、アメリカを舞台にした小説、『天球は翔ける』を取り上げました。本号でも、中国以外が舞台になった作品の一つ、『インド三国志』を紹介したいと思います。初出は、季刊誌「歴史と文学」1972年3月号から1973年9月号で、1984年に単行本『インド三国志 砂塵の夢』として平凡社から発行されました。

「砂塵の夢」という副題がついているのは、更に続編、続々編の含みがあったのでしょうか。このあたり、詳しくは下に掲載した『インド三国志』「終章兼序章」からの引用をお読み下さい。なお、副題は、講談社文庫版(1998年発行)には付いていません。下枠内、表紙の画像は平凡社版単行本です。(編集委員 橘雄三)



「インド三国志」も、かねてかきたいとおもっていたが、どうも日本の商業雑誌にはなじまないテーマであるらしいので、私も執筆の機会がなかった。いまから約十年あまり前、

じつは私はインドといささかのかわりがあった、インドは我が青春の一部なのだ。第二次世界大戦中の学生時代に、インド語やペルシャ語(ムガル王朝時代、ペルシャ語はインドの公用語であった)を習ったこともあり、ふつうの人よりはインドに関心をもつことが深かったのである。

『インド三国志』「終章兼序章」からの引用
傍線は編集委員の加筆

『インド三国志』最後の「終章兼序章」は不思議な章です。途中で終わることに対する言い訳のような内容になっています。引用します。

正確には一九七二年、同人システムで「歴史と文学」という季刊誌を出すことになり、連載の話が出たとき、私はためらわずに『インド三国志』を書くことにした。

(中略)

旅行が重なる、休載ということにしてもらったが、季刊の連載を一回休むということは、ブランクが半年になってしまう。半年ものあいだ、前号のことをすっかり記憶してくれど期待するのは、作者の身勝手であり、読者にたいそう迷惑をかけることになる。そんな反省をした結果、私は『インド三国志』をいったん打ち切り、その後はその号の特集に合わせたテーマでエッセイを書くことにした。

『インド三国志』は十二回で、終わるともなく終わっているが、これを中国の『三国志』にあてはめると、長安で董卓が部下の呂布に殺されたあたりではないかとおもう。劉備などはまだ居候時代で、諸葛孔明が一歳の少年である。『三国志』の序盤といつてよいだろう。

私の『インド三国志』は、マラーターの英傑シヴァージーが死んだ年(二六八〇)でほぼ終わっている。そして、翌年の一月、アウラングゼーの息子のアクバルが父にそむいて挙兵したが老獺な父帝の畏にかかって逃亡したくだけりをつけ加えた。

いずれ私はこの続きを書かねばな

らないが、前述のいきさつで、中断の期間が長くなったので、『インド三国志』はその序盤で終わった形にしておきたい。(中略)そこでここにかんたんな終章をつけ加える。これは終章であると同時に、つぎに書く続編の梗概であるので、そちらからみれば序章にあたる。(以下略)

■二段目冒頭の傍線、一九七二年は、日中の国交が正常化した年で、この年から、陳舜臣さんの中国訪問・旅行が始まり、多忙となり、休載を余儀なくされたと思えます。



タージ・マハル

search.yahoo.co.jpより

『インド三国志』時代背景、登場人物とムガル帝国系図

時代背景

西暦	葡・英・蘭・仏	インド(ムガル帝国成立以降)
1498		ポルトガルの航海者ヴァスコ・ダ・ガマ、インド西岸に到着。のち、インド南部西岸ゴアほか、ポルトガルの恒久的植民地ができる
1526		ムガル帝国成立(~1858) ①パーブル(位1526-30)
1530		②フマユーン(位1530-56)
1558		③アクバル(位1556-1605)、アグラに遷都
1564		アクバル、非イスラム教徒への人頭税を廃止
1600	イギリス東インド会社設立	
1602	オランダ東インド会社設立	
1604	フランス東インド会社設立	
1605		④ジャハーン・ギール(位1605-27)
1624		オランダ、ゼーランディア城を拠点に台湾を支配(~1662)
1632		⑤シャー・ジャハーン(位1628-58)、タージ・マハル廟を造営(~1653)
1643	仏王ルイ14世(位1643-1715)即位	
1652	第1回英蘭戦争(~54)	
1658		⑥アウラングゼーブ(位1658-1707)
1664	1604年に創設されながら、活動を停止していたフランス東インド会社再建	
1665	第2回英蘭戦争(~67)	
1672	第3回英蘭戦争(~74)	
1674		シヴァージー(1627-80)、マラーター王国建国
1679		アウラングゼーブ、非イスラム教徒への人頭税を復活
1689		ムガル帝国、南インドまで版図を拡げる。版図最大
1707		アウラングゼーブ死去
1708		マラーター同盟結成(~1818)
1757		英仏、ブラッシーの戦い
1765		イギリスとのアラハーバード条約により、ムガル皇帝は年金を受けて、詩を作るだけの存在に
1837	英ヴィクトリア女王(位1837-1901)即位	
1857		インド大反乱(~1859)
1858		ムガル帝国滅亡
1877		ヴィクトリア女王を皇帝にいただくインド帝国成立
1947		イギリス領インド帝国が解体、インド連邦とパキスタン(後にバングラデシュとして独立する飛地の東パキスタンを含む)の二国に分かれて独立

主な登場人物

●アウラングゼーブ ムガル第六代皇帝。この物語の主人公。イスラム教スンニー派の教条主義的なまでの信者で、父から「祈る人」と呼ばれた。異教徒の跋扈を許せず戦いにあぐくれ、帝国を衰微させ、滅亡へ導く。

●皇子アクバル アウラングゼーブ帝の息子。ラージュプート族討伐の総司令官に任じられるが、父のやり方に懐疑的のため、熱が入らない。

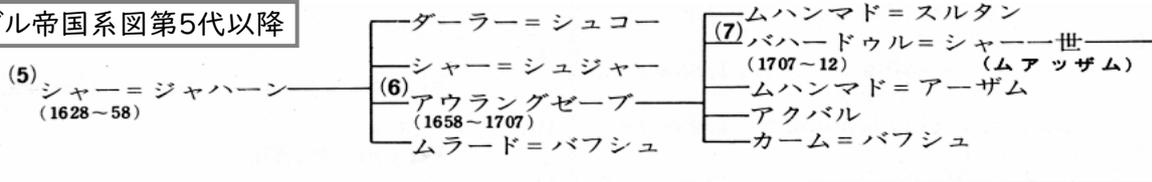
●シヴァージー・ボンストラ マラーター族を率いるヒンズー教徒。「組織の天才、作戦の神様」と呼ばれ、宗教的情熱を国民に点火し、悲願の王国をつくりあげる。

●フランソア・カロン フランス人。オランダ船のコック助手から平戸のオランダ商館のアシスタントとなり、日本女性と結婚。平戸商館長からバタヴィア商務総監にまでなるが、誹謗をうけて引退。誘われてフランス東インド会社の筆頭理事となり、フランスのインド進出の指揮をとるが…。

●フーシユハール・ハーン ハイバル諸部族の一つであるハッタク族の指導者。歌をつくるのも歌うのもうまく、歌で諸部族の心を結びつけようとする。

●ドウルガー・ダース ラージュプート族諸藩の一つ、ヒンズー教徒のマールワール藩王国の筆頭家老で、拔群の指導力をもつ。

ムガル帝国系図第5代以降



出典は京大東洋史辞典編纂会編『新編 東洋史辞典』

『インド三国志』各章の要約

章	内 容
新月の旗	<p>「新月の旗」、イスラム教に関連する旗には、星をともなった三日月を用いるものが多い。</p> <p>本作品は、支配者集団がイスラム教スンニー派のムガル帝国の時代。王子は何人いても、生き残るのは一人。「帝位か死か」という王位継承戦争を勝ち抜き、1658年、アウラングゼーブが第6代皇帝となる。彼が最重要登場人物。作品の題名の「三国」は、まず①ムガル帝国、二つ目は②ヒンズー教を信仰するマラーター族など土着勢力、そして今一つは③イギリス東インド会社。</p> <p>右の画像は、1947年、イギリス領インド帝国から独立したパキスタンの国旗</p>
悍馬 かんば	英傑シヴァージー、マラーター族独立派総帥として起ちあがる
虎の爪	シヴァージー、ムガル帝国の属国ビジャープル王国の総司令官を巧妙な武器、虎の爪でだまし討ちにする
謀略の渦	ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスの東インド(インド及び東南アジア)貿易(香辛料が目当て。後、中国の茶、インドの綿布なども)における勢力争い ムガルの勇猛な武將で且つ外交家でもあるジャイ・シングは、アウラングゼーブに、シヴァージーを帰順させる策を進言。シヴァージーはジャイ・シングの策にはまり、ムガルの將軍となる。ジャイ・シングのすすめでアグラへ
アグラ脱出	アグラでのシヴァージーは、常時、見張られているようであった。また、アグラには、かつて、シヴァージーに痛い目に遭った將軍、司令官もいて、復讐される危険もあった。シヴァージーは、こんな軟禁状態に耐えられず、アグラを脱出。この脱出劇は練られたストーリーになっている。1666年の出来事
老いたる名馬	イギリス東インド会社、1600年設立。オランダ東インド会社、1602年設立。どちらも民間から発足。フランス東インド会社、1604年設立。こちらは、国家主導で発足。■第二次イギリス・オランダ戦争、1665-67 フランソア・カロン、1619年、オランダ船のコック助手として平戸に着く。その後、平戸のオランダ商館のアシスタントとして働き、日本人妻との間に6人の子どもをもうける。やがて、平戸のオランダ商館長に出世。キリスト教を信仰するオランダが、貿易独占という好条件で日本に留まり得たのはカロンの功績。更に後、バタヴィアの商務総監にまで栄進し、1651年、「名誉ある解職」というかたちで東インド会社を去る。■台湾ゼーランジャ城 浜田弥兵衛事件
栄光と没落	カロンはオランダの東インド会社を去って十余年、フランスから、再建される東インド会社の筆頭理事に迎えられる。カロンは、彼の片腕として、マルカラというペルシャ人を選ぶ。マルカラは、予想以上の業績を上げる。カロンは自分の地位が脅かされるのではと不安になり、マルカラ弾劾を上申したりするが…。 カロンは運を使い果たしたかに見える。彼の建議によるセイロンのオランダ基地攻撃は裏目に出、結果、1673年、本国召還となるが…
ポンディシェリー 事始め	1670年代前半、ベンガル湾側、インド半島南部では、古株のオランダと新参のフランスが激突していた。イギリスがガンジス河口近くにカルカッタを建設するのはもう少し後である。カロンとマルカラのあと、フランス東インド会社に新しいスター、フランソア・マルタンが登場する。彼が手当てし、のち、二百八十年にわたって、インドにおけるフランスの拠点となったのがポンディシェリーである。 1674年、シヴァージー、マラーター王国建国、マハラジャ(大王)に即位
西北の道	イスラム教スンニー派の教条主義的信者、アウラングゼーブ帝の戦った戦争の中で、宗教的色彩の極めて薄いのが、西北諸部族、特に、ハイバル峠を挟む地域の諸部族との戦いであった。相手もムガル帝国と同じイスラム教スンニー派で、戦いの原因は、政治的、経済的なものであった。 1670年代の前半において西北の風雲が急を告げたことは、シヴァージーのマラーター王国基礎づくりに、大いに幸いした。ほかでは、ムガル帝国とシク教徒の争い、ムガル帝国とラージュプート族との戦いなども、結果として、マラーター建国を助けた
脱出行	第3代皇帝アクバルは腐心し、勇猛で戦闘的なラージュプート族をムガルの同盟者に変え、以来、同族はムガル帝国の藩屏となっていた。アウラングゼーブ帝も、王位継承戦争時のことで、ラージュプート族藩王国の中心、マールワール王国のマハラジャ、ジャスワント・シングに借りがあった。この度の西北諸部族との戦いでも、ジャスワント・シング指揮するラージュプート軍に随分、助けられた。1678年、ジャスワント・シングが死んだ。狂信的イスラム教スンニー派のアウラングゼーブ帝は、異教徒ラージュプート族の粛清をこれまでずっと考えていた。その時が来た。アウラングゼーブ帝は、ジャスワント・シングの幼い遺子とその生母をデリーに呼び、監視下に置いた。ところで、マールワール藩王国にはドウルガー・ダースという抜群の指導力を持つ筆頭家老がいた。彼の指揮の下、母子はデリーを脱出、藩王国へ逃げ帰る
浅い波瀾と深い罠	1679年、アウラングゼーブ帝は、ラージュプート族討伐の総司令官に息子アクバルを任命、自らも親征する。この軍事行動中に、皇子アクバルは叛旗を翻す。しかし、老獪なアウラングゼーブ帝に軽くあしらわれ、生涯逃亡の身となる 1680年、マラーター王国のシヴァージー死去。後を長男シャムブージーが継ぎ、更にその後を異母弟のラージャー・ラームが継ぐ。彼は、よくマラーター王国を掌握、ムガル帝国に一歩もあとに退かなかった
終章兼序章	皇子アクバルは、デカンに逃げ、マラーター王国を頼り、更にペルシャに逃れ、1706年、その地で死んだ。翌年、アウラングゼーブ帝が、89才で死去。『インド三国志』はこの辺りで終わる ムガル帝国は、実質は、アウラングゼーブ帝の死(1707)によって解体したといえる。この後、イギリス東インド会社と、遅れて参入してきたフランス東インド会社との覇権争いが熾烈を極める。イギリス東インド会社のクライヴは、1757年、デュプレクス(1742-54 フランス総督)が去った後のフランスと戦い(プラッシーの戦い)、勝利し、ベンガルの支配を揺るぎないものとした フランスとの戦いを勝ち抜いたイギリスとマラーター同盟との三度にわたる戦いは1818年まで続く ムガル帝国は、形式的にはセポイの反乱(1857-59)まで生きのびる



『インド三国志』いくつかの補足

《 1. シャー・ジャハーン帝、幽閉されたアグラ城から、死ぬまでタージ・マハルを遠望 》

『インド三国志』から引用します。()内、明朝体部分は編集委員の加筆。掲載頁は講談社文庫版による。



シャー・ジャハーン帝は(アウラングゼーブに)屈服し、アグラ城の一室に死ぬまで幽閉された。

息子に強いられたこの退位は1658年のことで、シャー・ジャハーンの死は1666年である。

アグラ城の彼の部屋からは、最愛の妻を葬ったタージ・マハルが見える。月夜に夢のようにかがやくドームが廃帝の心をどれほど揺りうごかしたであろうか。娘のジェハナラ・ベガムに看護され、八年の幽閉生活の幕を閉じて、彼は妻のねむるそのタージ・マハルに葬られたのである。(p. 51)

《 2. 陳さん、厳しいアウラングゼーブ評価 》

陳舜臣さんは、ムガル帝国第三代皇帝アクバルに対しては、

アクバル帝は、父譲りのシーア派的傾向があったうえに、教師であったアブドルラティフも、正統主義に固執しなかった人物なので、きわめて柔軟な宗教観をもつようになった。

彼が回教徒でありながら、好んでヒンズー教の教義をきいたのは、懐柔策、好奇心などに理由をもとめるよりも、宗教上の包容力の大きさを物語るエピソードと解すべきであろう。(p. 22)

と、好意的である。

アクバルは、実際の生活においても、ヒンズー教徒の女性を妃として納れ、政治施策では、非イスラム教徒への人頭税(ジズヤ)を廃止した。

一方、アウラングゼーブ帝はイスラム教スンニー派の教条主義的なまでの信者で、異教徒の跋扈が許せず、戦いにあけくれた。曾祖父アクバルが廃止した非イスラム教徒への人頭税(ジズヤ)も復活した。

このようなアウラングゼーブ帝に対する陳舜臣さんの評価は、

政治家としても宗教家としても、アウラングゼーブ帝は落第生であり、彼が五十年ものあいだ皇帝であったことは、ムガル王朝の悲劇といわねばならない。(p. 53)

と、手厳しい。

異質な文化の理解・受容・共存を信条とする陳さんにとっては当然かも知れない。

このことは、本通信第25号で取り上げた『世界の都市の物語4 イスタンブール』で、民族・宗教に寛大なオスマン帝国を「コスモポリタンの性格を強く持っている」と高く評価していることと軌を一にする。

《 3. インド、18世紀後半の勢力分布 》

